The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	繰り返しにおけるコミュニケーション効果
Author(s)	Kanjamapornkul, Sathida
Citation	大阪大学, 2021, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/82273
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（KANJAMAPORNKUL SATHIDA　）	
論文題名	繰り返しにおけるコミュニケーション効果

論文内容の要旨

「繰り返し（Repetition）」とは、書きことばにおいても話しことばにおいても、ある文脈に既に現れた語や文などを何度か再現することである。従来の言語行為の繰り返しは、単に文の冗長度を上げるに過ぎないものであり、非創造的なものであるため、避けられるべきものとして、否定的に見なされてきた。しかし、我々の日常会話では、相手の直前の発話を繰り返すことは普通に見られ、頻繁に出てくるものである。むしろ、繰り返しを一切使用しないままで発話すると不自然になってしまう可能性もある。つまり、繰り返しは、会話においては欠かせない必要な表現の一つと言える。

従来の研究では、繰り返しは相手の発話には不明な部分があり、十分に理解できないため、相手の発話を繰り返し相手に確かめるという「確認要求」ないし「説明要求」、談話の展開や発話の進行の助けをする「あいづち」、驚き・不満を表す「感情の表出」などという様々な機能を持つことが示されてきた。しかし、繰り返しをさらに明らかにするのはイントネーションのみならず、発話者の態度、声色、場面、文脈、話し手と聞き手の関係性なども注目すべきであるが、従来の研究でこれらの要素を考慮に入れたものは管見の限り少ない。

本研究では、日本語とタイ語の実際の会話例を考察した結果、会話の種類によって、繰り返しの機能と使用傾向が異なることが明らかになった。テレビドラマやアニメ、漫画や小説、映画および歌劇などで現れる会話は、あらかじめ設定されている会話であり、発話者は脚本またはシナリオに沿って会話を進めるという会話の種類である。本研究では、このような会話を「フィクション会話」と呼ぶ。一方、本研究における「自然会話」とはフィクション会話と異なり、「「何を話すか」や「どう話すか」が発話者に委ねられている、操作されていない会話」を指すこととする。そのため、あらかじめ出演者の間で口裏を合わせていると考えられるトーク番組などについても、話の流れによって発話当事者に発話内容の決定が任される場合があるため、本研究ではトーク番組やインタビュー番組、バラエティ番組およびラジオ番組は自然会話に準ずるものとする。日本語とタイ語のフィクション会話においても自然会話においても、繰り返しは「時間稼ぎ」、「相手の発話の促進」、「説明要求／確認要求」、「感情の表出」という機能が観察され、両種類の会話で共通していることがわかった。一方、相違点としては、自然会話では繰り返しは「あいづち」、「応答」、「からかい」の機能も確認されたが、フィクション会話ではこれらの機能が見当たらないことがわかった。また、両種類の会話とも「感情の表出」の機能が最も際立って用いられることが明らかとなったが、実際は会話の種類によって「感情の表出」の使用目的は完全に異なる。フィクション会話では、繰り返しが持つ最も重要なコミュニケーション効果は、発話者の感情を明示的に表出させる役割であり、発話者の態度形成を促す感情効果であると考えられる。それに対して、自然会話では、繰り返しが持つ最も重要なコミュニケーション効果は、発話当事者同士の一体感や共有感を醸成させ、コミュニケーションを円滑に進めながら、良好な人間関係を築かせる効果であると考えられる。

本研究における繰り返しの機能の調査結果から、フィクション会話と自然会話の相違点について新たな発見があった。フィクション会話と自然会話では、場面設定、状況、会話の目的、発話当事者の間の会話量、会話の進行の仕方という両種類の会話の性質が完全に異なることが明らかになった。フィクション会話は、視聴者または観客に向けて、発話者が演じるある人物の情報や感情などを視聴者へ伝達するのが目的である。それに対して、自然会話は会話の相手とお互いに何らかの情報を交換したり、相手との良好な人間関係を築いたりすることが目的である。このことによって、フィクション会話においては、会話がスムーズに進行されるように、また視聴者に出演者の発話および感情や態度

などを明確に伝達するために、発音や意味内容に曖昧さのあるあいづち詞、感動詞、フィラー、言い間違い、言い直し、発話の重複（オーバーラップ）の使用を避けるのではないかと推測される。一方、自然会話の場合は、相手との円滑なコミュニケーションで良好な関係を築くために、会話に積極的に参加していることを示すというあいづち詞や感動詞が多用されるのではないかと考えられる。加えて、自然会話はフィクション会話とは異なり、発話者が喋ることはあらかじめ作られたものではなく、発話者はその時点で思っていることを即興で話す。そのため、言い間違い、言い直し、発話の重複は頻繁に現れるのは当然であると言える。

加えて、日本語とタイ語のフィクション会話と自然会話における「感情の表出」としての繰り返しは、発話者が相手の発話のある部分に対して「意外感」を感じたことを表明するものであると考えられる。すなわち、繰り返し発話に「相手がこのような発言をするとは思わなかった」という意味合いが含まれるのである。さらに、両言語のフィクション会話と自然会話で用いられる「感情の表出」は、ポジティブな態度、ネガティブな態度、中立的態度という大きく3種類の態度が分類できる。しかし、会話の種類によって、繰り返しにおける「感情の表出」の使用目的と使用傾向が異なっていくことが明らかになった。フィクション会話では、ネガティブ態度が用いられる傾向が強いのに対し、自然会話ではポジティブな態度が用いられる傾向が強いことが確認された。

さらに、繰り返しの表現形式は両言語ともに、相手の発話をそのまま繰り返すという「直接的繰り返し」、および繰り返し発話に他形式が付加されるという「間接的繰り返し」の大きく2種類に分けられる。「間接的繰り返し」には多種多様な形式があることが確認されたが、会話の種類によって、使用される形式の種類および使用傾向が異なることが明らかになった。また、両言語の両種類の会話においては、「間接的繰り返し」が用いられるとはいえ、「直接的繰り返し」と比較すると、圧倒的に少ないことがわかった。さらに、「直接的繰り返し」が、「感情の表出」の機能を果たす際に最も多く使用されることがわかった。このことから、繰り返しはどちらか言えば、感情表現を指向するものではないかと推測される。

また、発話者は感情を表出するには繰り返しのほか、感動詞も使用するが、実際は両者の働きや性質は異なることがわかった。感動詞と繰り返しの共通点としては、両者とも発話者の感情を表す役割を担っている点である。一方、両者の相違点は、感動詞は反射的に出てくる音声または自然発生的な反応である。繰り返しは発話者の認識過程を通して出てくる記号化されたものであり、感動詞による音声および意味内容は曖昧であるが、繰り返しの場合は音声も意味内容も明示的である。加えて、感動詞では発話者は相手の発話のどの部分に興味を持つのか、あるいは問題を感じるのかについて明示的に特定できない。それに対して、繰り返しは、発話者は相手の発話のどの部分を指すのかが明示的に特定できる。このように、繰り返しは視聴者が存在するフィクション会話に向いているのではないかと考えられる。一方、台本またはシナリオに束縛されず、その時点の考えを自由に表出する自然会話においては、反射的に出てくる音声あるいは自然発生的な反応である感動詞が多く出現するのは、当然の帰結となる。

他にも、本研究における繰り返しの調査結果から、独り言という言語現象についても新たな発見を見出すことができた。独り言は「典型的独り言」と「擬似的独り言」の大きく2種類に分類できると考えられる。「擬似的独り言」とは、テレビドラマ、アニメ、映画、歌劇などのようなフィクション会話に出現するものであり、発話時には、周辺に誰もいないまたは相手が存在しないが、実際は視聴者が存在しているというものである。つまり、この場合の独り言は、発話者は誰かのために情報を伝達しているのであり、通常の会話と同様なものと言えよう。一方、自然会話に現れる「典型的独り言」はいわば、自然発生的なものまたは反射的な反応に過ぎないと考えられる。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　KANJAMAPORNKUL SATHIDA　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　教　授	荘　司　育　子
	副 査　教　授	中　田　一　志
	副 査　教　授	宮　本　マラシー
	副 査　准教授	小　森　万　里
	副 査　准教授	髙　井　美　穂

論文審査の結果の要旨

本論文は、相手の発話の全部あるいは一部をオウム返しに繰り返す行為について、それがコミュニケーション上にどのような意義があるのかを言語学的な観点から考察したものである。前出の言語形式を再現するに過ぎないとも言える繰り返しは、情報伝達の際に新たな意味内容を提示しているわけではないという点では、フィラーや相づちとも似ているもので、コミュニケーション上はあまり注目される表現形式ではない。そのため、先行研究においても、豊富な言語事実やデータに基づいた見解というのはないに等しく、繰り返しそのものの言語現象についても、補足的に取り上げられるのが常であった。そのような背景の中で、繰り返しを真正面から取り上げ、膨大な言語データをつぶさに観察することで、通説に対して一石を投じる見解が披露されるなど、目を見張るものがあったと言える。

まず、先行研究について非常に多くの関連分野の論考に丁寧に当たっており、学術用語としての繰り返しの概念を網羅するとともに、一連の研究の流れにおける本研究の立場が明確に位置づけられている。繰り返しは、口頭表現に特有の言語現象でもあるため、言語資料としては多角的にアプローチされる傾向があるにもかかわらず、それらを丁寧に拾い上げながら議論の俎上に載せている点は、研究における継承性を十分に満たしていると言える。

また、繰り返しの言語形式には、しばしば引用の助詞などが下接するのであるが、従来の研究では、下接する助詞の視点から捉えられるのが常で、助詞がもつ意味機能だとされているところを、本研究ではそれを否定し、他でもない繰り返しがその意味機能を担うのだという、目から鱗のような見解を打ち出している。さらに、自然会話ないしフィクション会話として区別される言語資料や言語事実について、看過できない大きな質の違いを新たに見いだした点は、非常に高く評価できる。日本語とタイ語を対照させることで得た知見などとも合わせ、新規性に富んだものとなっている。

さらに特筆すべきは、論を裏打ちする言語データについてであり、その量についてはもちろんのこと、データの扱いや読み解きにおいては申し分がない。実際、口頭表現を研究対象とする以上は、発話者の態度や声色など、言語化されていない要素こそが意味機能を読み解く重要な鍵となるが、一般にこのような要素を勘案する考察作業は決して容易ではなく、非常に多くの時間と手間がかかる。しかし、本研究では、それを厭うことなく、「感情の表出」こそが繰り返しの意味機能の要であると主張するに足る十分な観察と記述が行われており、その考察の過程には相応の実証性が認められる。

繰り返しのもつ最大の特徴が「感情の表出」であるとすることによって、そのような意味機能を担う他の言語形式や類義表現の存在が当然の課題として浮上してくる。また、「感情の表出」を初めとする種々の意味機能については、それらの区別や判定をするための考察が必要となるが、本研究ではそれらの問題に対しても回避することなく、詳細な議論の展開がなされており、論理性にも長けている。

本論文は、全体にわたって構成や見せ方に工夫が見られ、読み手に配慮した論考となっている。多岐にわたる要点が一目で理解できるよう、特に図表の作り込みには余念がない。各セクションの説明に使われる文言や表現には矛盾がなく、表記の面でも概ね正確を期しており、統一の取れた書きぶりとなっている。明確性という点においては、記述の丁寧さと言語データによる傍証によって発揮されている。

以上が評価できる点であるが、未熟さゆえに不備や惜しまれる点も少なからず見受けられたことは言うまでもない。ただ、これらは最終評価の判定に影響を及ぼすものではなく、本審査委員会では、本論文が博士（日本語・日本文化）の学位を授与するにふさわしい水準に達しているものと判断し、審査委員の総意により合格と結論づけた。